

座談会

IASB新・旧理事に訊く、 IFRSの今後の展開と日本の役割 ～IFRSの開発、そして世界を舞台に 活躍できる会計人育成のために～



左から、関根愛子氏、山田辰己氏、鶯地隆継氏、
吉田健太郎氏

前国際会計基準審議会（IASB）理事 やま だ たつ み 山田 辰己
 新国際会計基準審議会（IASB）理事 おう ち たかつぐ 鶯地 隆継
 日本公認会計士協会副会長 せき ね あい こ 関根 愛子
 司会：自主規制・業務本部 よし だ けん たろう 吉田 健太郎

IFRS財団は、2011年2月25日に、鶯地隆継氏（住友商事㈱）フィナンシャル・リソースズグループ長補佐、IFRS解釈指針委員会委員）をIASBの理事に指名すると発表した。IASBが発足した2001年から10年間にわたって理事を務められた山田辰己氏の後任として、任期は2011年7月1日からの5年間。その後、3年間の更新が可能とされている。

本誌では、山田氏と鶯地氏のお2人をお迎えするとともに、日本公認会計士協会のIFRS担当副会長で、国際会計士倫理基準審議会（IESBA）委員の経験を持つ関根愛子氏にも加わっていただき、「IFRSの開発、そして世界を舞台に活躍できる会計人育成のために」と題して座談会を開催した。国際会議における、基準設定のための議論の様子のほか、IASBのような、世界中から人材が集まる組織で活動し、貢献できるような人材となるためにはどのような知識やスキル、心構えが求められるかなどについてお話を伺った。

これから職業会計人を目指す方や、IASBなどで基準の開発に携わりたいと考えている方々の参考となるだけでなく、世界で活躍できる日本の会計人を育成するためのインフラを、今後、どのように整えていくべきかといった議論の参考になれば幸いである。

1 IASBでの10年を振り返って

吉田 本日は、大変お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。

「IFRSの開発、そして世界を舞台に活躍できる会計人育成のために」をテーマに座談会を開催させていただきます。

本日は、本年6月末で国際会計基準審議会（IASB）理事を退任される山田辰己さん、本年7月より同理事に就任される鷺地隆継さんをお迎えいたしました。

また、我が国の企業会計審議会や企業会計基準委員会（ASBJ）の委員で、国際会計士倫理基準審議会（IESBA）の委員を務められた経験をお持ちの関根愛子日本公認会計士協会副会長（IFRS担当）にも加わっていただきます。

御三方ともに日本国内及び国際的な組織の双方で、ルール作りに関わってこられた豊富な経験をお持ちです。本日は、正に我が国を代表する国際派の会計人の皆さんから、いろいろな話をお伺いしたいと思っています。よろしくお伺いいたします。

まず、山田さんにお伺いします。山田さんは、旧国際会計基準委員会（IASC）の時代から日本代表として国際会計基準作りに携わってこられ、2001年にIASBが発足してからは、東洋人ボードメンバーのパイオニアとして活躍してこられました。

IASBでの10年間の歩みを振り返られて、今、どのようなお考えをお持ちかお聞かせください。

山田 まず、IASBが2001年に設立された理由からお話させていただきます。IASCは、1973年に設立され、

国際会計基準（IAS）を作っていましたが、組織の構成員は各国の会計専門職の職業団体であり、日本では、日本公認会計士協会が構成員でした。このため、各国の会計基準の設定主体とIASCの構成員とが必ずしも同一ではありませんでした。なぜ、IASB設立の際にIASCという組織を改正したかという、理由は幾つかあるのですが、一番大きな理由は、各国の基準設定主体とダイレクトな関係を結びたいということでした。

2001年当時、IFRSを本格的に使用しているのはスイスの多国籍企業ぐらいでした。そこで、我々が考えたのは、アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・カナダ・オーストラリア・ニュージーランド・日本の8か国をリエゾン国と指定して、その国の会計基準がIFRSと似た中身になれば、その主要国が世界の経済の大部分をカバーしていますので、実質的に会計基準の統合化、コンバージェンスが図れるのではないかと非常に緩いコンバージェンスという概念でした。

2005年から、EUでIFRSが8,000社ほどの上場企業の連結財務諸表に強制適用され、オーストラリアも同年から、ニュージーランドは2007年か

ら採用するようになりました。IFRSを採用する国の拡大に伴って、リエゾン国を中心としたコンバージェンスという考え方ではなく、むしろ、IFRSをそのまま採用してもらおう動きになってくるのです。

その後、中国が2007年から、ブラジルが2010年から、カナダ、韓国、その他の国が2011年からIFRSを採用しています。その採用の仕方も、各国の会計基準をIFRSと同じになるように改訂するというコンバージェンスから、IFRSをそのまま各国が採用することによって、世界的な財務諸表の比較可能性が、より高いレベルで達成できることが期待されています。

このように、今、IASBが強く推奨しているのは、一言一句違わない形での採用、すなわちアドプションです。また、「IFRS（国際財務報告基準）」という言葉は、IASBの第2回目ぐらいの会合で決めたものですが、これだけ人口に膾炙するようになったことに非常に驚きを感じると同時に、10年の間に世界は激変したという印象を持っています。

2 IASB理事就任に当たって

吉田 2011年6月に山田さんが退任された後、鷺地さんが、後任として7月からIASBの理事に就任されることが2011年2月に発表されております。

山田さんから、鷺地さんへの期待をお話いただけますでしょうか。

山田 私は公認会計士という立場でしたが、鷺地さんは、企業での財務諸表作成者という立場を背負われて参加されます。会計基準作りの中で、今後、IFRSを採用する国が増



前IASB理事

山田辰己氏

えてくると、基準の使い勝手のよさという面が重要なポイントになってくると思います。そこで、作成者のバックグラウンドを持った鶯地さんが発言できる局面は、大変多いのではないかと思います。

IFRSは基本的に、原則ベースの基準の作り方をしているの、コアとなる原則は明示されますが、適用ガイダンスを細かく決めてはいません。今後、原則ベースを守りながら、作成者にとって使い勝手のよい基準を作るという点で、鶯地さんの経験を生かせる場合が多いと思います。

吉田 ありがとうございます。

山田さんからのエールがありました。鶯地さん、IASB理事に就任されるに当たっての抱負をお聞かせください。

鶯地 IASBにとっても日本にとっても、あるいはアメリカにとっても、2011年の7月という非常に重要な時期に理事の仕事を引き継ぐことは、大変なプレッシャーがあります。これまで山田さんをはじめ、皆様方のご努力で築き上げてきた実績、日本に対する信頼を損ねることなく、さらにそれを発展させていく責任があると思います。

理事への就任が決まり、皆さんから、日本のために頑張ってくださいと声を掛けていただくことがあります。今後、IFRSを日本が強制適用することも視野に入れて、今のうちでできるだけ日本の考え方をIFRSに反映させていくことが、私の果たすべき重要な役割だと思います。

ただ、気持ちとしては、日本のためだけでなく、やはり世界のために、10年後、20年後を見据えて、私の任期の5年間に何ができるかを考えなければいけないと思っています。

吉田 具体的にどのようにお考えでしょうか。

鶯地 会計基準は、それぞれの国の社会制度の重要なインフラストラクチャーですから、お互いの国の社会制度のハーモナイゼーションがないところで会計基準だけを無理やり1つにしようとしても、いろいろな摩擦があります。かといって、会社法、税法、民法、その他経済に関する行政管理を国際的に統一することは、国際政府でもない限り実際には無理な話です。

一方で、通信技術の発達等により、資本市場のグローバル化は、予想をはるかに上回る勢いで現実のものとなっています。このような中で、国際的な資本市場のインフラ整備は必ず行わなければならないと思います。その時に、何が先頭に立って道を開いていくかということ、それは正に、会計基準ではないかと思っています。

なぜならば、会計基準は、経済事象の計測のツールですから、これをまず統一して整備していかないと、ほかの制度の共通化は進まないと思います。

特に、概念フレームワークを中心とした基本的な価値測定理念の共通化は、本来、最初に行わなければならないことだと思っています。具体的な会計処理の共有も大切ですが、その概念フレームワークについて、本当は、国際的な共通の合意・承認といった手続が先行するのが理想だと思っています。

ただ、概念フレームワークは、ドグマティック（教条的）にこれが正しいと強要する性質のものではないと思いますので、本当に十分に時間をかけて、合意形成していくことが

大事だと思います。

もう1つ、概念フレームワークができないと会計基準ができないというものでもないと思っています。日本では誤解されている方が多いと思いますが、IFRSは決して概念フレームワークから演繹的に基準を作成しているわけではないと思います。経済は日々変化していきますから、1度作った概念フレームワークが未来永劫正しいということはないと思います。個々の経済事象をフォローして、それぞれの具体的な会計基準を作っていく過程で、何がどうあるべきなのかという議論があって、その時点その時点で最も適切な会計基準が開発されていくのだと思います。その結果、帰納法的に概念フレームワークを修正しなければならないということは、当然、あり得ると思います。

これは私の理解ですが、概念フレームワークと個々の会計基準は、互いに関連しながら発展していくものだと思います。

最初の話に戻りますが、日本のためだけでなく世界のためという中で、当然、日本にとってのメリットも考えなければいけない。そのときに大事なのは、あからさまに日本の考え方はこうだ、あるいは、日本は特殊なのだからこれを認めてほしいという議論は、うまい言い方ではないと思っています。

今、申し上げた世界全体の利益のために、高品質な会計基準を作るという目標のために、日本としてどのように貢献できるか、あるいは、日本の経験で活かせるものはあるのかという観点から議論していく姿勢が非常に大事であると思っています。結果的には、それが日本のメリット

につながっていくと思います。ですから、こういったことは、1年、2年ではなく、私の任期を超えて10年といった長いスパンで実現していくものだと思います。それを見据えながらの私の最初の任期である5年間に何ができるかを考えていきたいと思っています。

3 IFRS導入と我が国の対応

吉田 続きまして、現在、企業会計審議会やASBJの委員をお務めの関根さんにお伺いします。

我が国の会計基準設定主体の関係者というお立場からお伺いしたいのですが、我が国の会計基準設定主体がどのように対応してきたかについて、日本の立場からお話いただけますか。

関根 日本の場合は、近年、IFRSとのコンバージェンスを中心に会計基準を開発してきましたが、上場企業の連結財務諸表へのIFRSの強制適用について、企業会計審議会による「我が国における国際会計基準の取扱いに関する意見書（中間報告）」において、強制適用の判断時期から準備に少なくとも3年を要し、来年を目処に意思決定を行うとされていることとの関係が重要になっていると思います。

例えば、実際にIFRSが強制適用になるのであれば、適用対象となる企業にとっては、途中で少し違う基準に変更され、さらに、IFRSの適用時にもう1度変更するのは実務的にも煩雑だし、利用者にとっても分かりづらいという意見があります。他方、IFRSを適用するに当たって、実際に日本の基準としてよく理解して、ある程度近付いておいた方がよ

いのではないかといった意見もあり、どのようなタイミングで日本基準の開発をするのかという点が議論になるかと思っています。

また、日本では連結財務諸表と個別財務諸表との関係をどうするのかといったことも議論になっています。正に今、これらを踏まえてどのように基準開発していくかをASBJで検討しているところです。

山田 IFRSの利用が拡大するに連れて、IASBは、経済大国である日本に、IFRSを受け入れるように働き掛けてきました。その結果、日本も2007年の8月に東京合意でコンバージェンスへ一歩踏み出しました。それから、当時「同等性評価」もありましたが、私は、これらによって日本の会計基準が国際レベルになり、今日の日本の存在感につながっていると思っています。ですから、今、指定国際会計基準ということで上場企業の連結財務諸表にIFRSをそのまま入れるという流れにはなっていますが、それはそれとして、それ以前の段階で、2007年8月の東京合意は、日本の関係者が大きくIFRSの中身に関心を持つようになったという意味で、ASBJの果たした役割は大きなものだったと思っています。

関根 私もそのように思っています。これから先、IFRSの開発が進んでいく中、日本の基準開発も、どのようなタイミングで行っていくのかを考えなければなりません。

今、ASBJからいろいろな基準の論点整理が出されています。これは幅広くいろいろな意見を聞くためのものですが、一方で、まだIFRSが固まっていないのにこのような整理が出されるとその方向に行くのかという議論も出てきています。

私はそうした議論をすること自体はよいことだと思っているのですが、実際のところ、どういうステップで行えばよいかについては、ASBJとしては悩ましいところではないかと思っています。基準をどのように作っていくべきかというのは、なかなか難しい議論であり、これは恐らく、IASBの基準を作る側の方たちにも通じる場所ではないかとも思います。

4 米国と欧州の思想の違い

山田 IASBのこれまでの歴史を考えると、2002年に米国会計基準審議会（FASB）との間で、ノーウォーク合意をしたことが後に大きな影響を与えました。

我々がスタートしたとき、まだ世界で使われていないIFRSの利用を拡大していくために、一番考えたのが、当時、非常に大きな影響力を持っているFASBと協力して、両者の基準を合わせていくことでした。これによって、世界の基準の共通化を図ることができると考えました。リエゾン国8か国との間で、基準の共通化を図るという方向性があったのですが、その中でも、特にアメリカとの間では、米国市場がIFRSを受け入れるようになれば、世界に与えるインパクトも大きいことから、米国会計基準とのコンバージェンスを積極的に進めました。ノーウォーク合意は、現在まで続く我々の活動の根幹を形造ったという意味で、非常に大きなポイントです。

IASBの活動の中で一番難しかった問題は、政治との闘いだったように思います。特に、ヨーロッパがIFRSを最初に採用した地域である

2 ことから、ヨーロッパからは常にかんりのプレッシャーを受けています。我々の組織は民間団体であり、しかも、会計の専門家が個人として判断して会計基準を作っていく仕組みになっているのですが、ヨーロッパでは、民間団体が国の法律にも匹敵するものを作ることに對して、基本的に違和感があるのです。

基準設定のプロセスは、国家を統制するガバナンス、そういう仕組みの中で政府によってある程度コントロールされるべきだという思想があるようです。2008年の金融危機の時はそういった点が非常に強く出てきました。経済の破綻を避けるために会計基準を変えるべきだというプレッシャーが、ヨーロッパから非常に強い形で示され、IASBもこれに応えざるを得なくなり、公開草案の公表による意見募集という手続を省略して、IAS第39号（金融商品：認識及び測定）を改訂しました。

このようにIASBは、いつも、政治等のプレッシャーと向き合いながらIFRSを作っていかななくてはならないという状況に置かれています。IFRSの利用の拡大に伴って、この傾向は、ますます強まっていくと思われます。

5 国際会議で印象に残ったこと

吉田 次に、国際的な組織や国際会議での皆さんのご活躍ぶりについて伺いたいと思います。山田さんはIASB、鷺地さんはIFRS解釈指針委員会、関根さんはIESBAでのご経験を中心に、日本にいたのではなかなか分からない、国際的な組織ならではの特徴や難しさ、我が国の組織との違いなどをお話いただけま

すでしょうか。また、皆さんがそれぞれの組織のメンバーになられて、最初の会議に出られたときの第一印象やカルチャーショック、印象に残るエピソード、苦労話等もお聞かせいただければと思います。

山田 どの会議にもいえませんが、意見を言わなければ存在感がないということが第1ですね。意見を言っても、それが的外れなものだと、何事もなかったかのように会議が進みます（笑）。当然ながら、きちんと深く考えた意見で、論理的な展開がきちんとしていけば理解も得られ、評価されることになります。

IASBでの基準作りですと、基本的には、概念フレームワークをベースに、それと論理的な矛盾がない意見が必要とされます。それから、自分の意見が概念フレームワークと違うのであれば、どうして違うのかを明確に伝えないといけません。英語の上手い下手は関係ありません。最も重要なのは発言の中身です。言いたい中身が筋道立っていて、それが適切な指摘であれば、英語が下手でも真剣に聞いてくれ、理解してくれます。

もう1つ、よくいわれていることですが、実際に経験して思うのは、各ボードメンバーの意見が違うのは当たり前で、むしろ、意見が同じ方がおかしいということが前提として存在しているという点です。会議では意見が違って、会議が終われば一緒に食事したり、飲みに行ったり、家族ぐるみの付き合いをするのは当たり前のことです。その辺りは、日本と少し違うところだと思います。

しかし、意見が違って、その主張が論理的に破綻していると、やはり評価されません。英語は話せた方

がよいですが、話せなくても、きちんと物事を深く考えていけば、その主張は評価される世界だと思います。

吉田 鷺地さん、お願いいたします。

鷺地 私がIFRS解釈指針委員会の会議に出て大変驚いたのは、説明者が最初に何も説明せずに、いきなり“any comments?”と聞いてくることでした。日本の会議ですと、通常、説明者は会議のかなりの時間を取って説明することからスタートしますが、いきなり“any comments?”で会議が始まります。会議に出る方としては、きっちりと資料を読み込んで準備をしておかないと、全く会議に参加できないということになります。

もう1つ、IFRS解釈指針委員会に限っていいますと、ここはIFRSの権威のある解釈をできる唯一の機関ですので、よく最高裁判所に例えられます。ここでの解釈は非常に影響力があります。

IFRS解釈指針委員会には、4大ファームのテクニカルのトップの方も出ておられます。ある意味、それぞれのファームでそれなりの解釈に関するファームポリシーもあるでしょうから、それについて議論をすり合わせるという部分もあると思います。



新IASB理事

鷺地隆継氏

その中で、ファーム同士のバトルもあるのではないかと思います、それが非常に紳士的でさりげなく行われ、全体の空気の流れの中で結論が決まってくる雰囲気があります。

私は財務諸表作成者の立場で参加しているわけですが、IFRS解釈指針委員会の委員を務めていた5年間は、日本では、まだ強制適用や任意適用をしていなかったの、日本の企業が直接関係することはほとんどありませんでした。本当に自分の国での解釈等を意識に入れながら議論するのは、実は、私自身は直接経験していません。

今後、日本として、そういったことが必要になってくるかもしれません。先ほど申し上げたようなマナーも含め、そういったことをきちんと頭に入れて、会議に参加することが非常に大事だと思います。自分たちの主張だけをして、それがIFRSに貢献しなければ、多分、何も受け入れてもらえないと思います。

吉田 関根さん、いかがですか。

関根 私の場合、会計ではなく、倫理での国際会議でしたが、お2人と同じような印象を持っています。

私は、メンバーになる前にテクニカルアドバイザーとして半年ほど会議に出席してから正式にメンバーになりましたが、その頃は、独立性の規程を大改定している真っ只中で、資料も膨大にあり、皆さんが議論しているところへ途中から参加することになり、議論されていること自体が全く分からないのではと非常に心配していました。

しかし、実際の会議で話されていることは意外と常識的なことが多く、内容が分からないということはあまりありませんでした。また、会議を

聞きながら自分が考えたことを別の人が発言したりして、考え方はそれほど違わないものなのだと思う場面もありました。

しかしながら、聞くだけでなく、本当の意味で会議に参加する、すなわち、山田さんがおっしゃったように、筋の通ったことを、タイミングよくきちんと深く考えた意見として言い、相手の理解を得るといのはなかなか難しいものです。特に、IESBAの会議に参加した当初は、議論が終盤にかかっている、過去の経緯が十分には把握できないこともあり、ともすれば聞いているだけになってしまおうと思ひ、まずは、最低1日1回、次に午前と午後で1回ずつ、さらに1テーマに1回ずつ、自分で必ず意見を言おうと決めました。そして、タイミングよく話し、理解を得るにはどうするかを考えながら参加していました。

会議への参加の仕方、進め方ということでは、IESBAの会議に参加した当初の経験で1つ印象に残っていることがあります。独立性の規程の改定において、公開草案のコメントを受けて1つの変更が入られたのですが、私はそれを実務に適用することに懸念を持ち、反対意見を述べました。私の意見に賛同してくれる方もいましたが、過去の経緯もあり、全体としては通らず、変更案はそのまま最終規程に盛り込まれることになりました。

IESBAでは、規程を最終にする直前に、公開草案から大きな変更がある等、再公開草案にする必要がないかを審議します。私にとってこれは非常に大きな変更だと思ったものですから、再公開草案とすることが必要と提案しました。しかしながら、

再公開草案化はあまり行われぬものということもあって、当初は、必要ないのではないかとする意見が多かったのですが、メンバーの1人が再公開草案化に賛成する意見を述べられました。この方には、会議外でも私の懸念について相談したことがあり、それを覚えていたのか、「確かに大きな変更と思う人もいるかもしれないから、それは聞いてみる価値があるのではないか」と発言されました。

その方は、倫理規程の開発についての経験が豊富で、メンバーの中でも中心的な役割を担っている方の1人でしたが、これを契機に会議の雰囲気が変わり、1人を除いて賛成で、再公開草案になったということがありました。このことは、いろいろな意味で、その後の会議の進め方として非常に参考になりました。

6 提案に反対や棄権をするには勇気が要る

山田 IESBAでは、反対意見は基準の中に記載されるのですか。

関根 最終規程化の際には記載されます。問題となった変更点は、再公開草案化したものの、反対するコメントはあまり多くなく、ほぼ原案どおり最終化されたため、最終規程化の際には私は棄権しました。棄権の理由もそこで述べ、議事録にも載ります。そのときの棄権の理由は、公開草案等に寄せられた意見を基にバランスを考えた基準となっていると思うが、適用が難しいところがあることを懸念しているので賛成できないとしました。

山田 棄権で意見を述べられるのはよいですね。IASBは棄権だと意見は記載されません。

私も何回か反対意見を書いています。やはり非常に勇気が要ります。自分で信じていなければ書けないし、書いてある理由が説得的でないとは逆に批判されます。

IASBで面白いのは、その問題をよく分かっている人が反対することが多いということです。私は今、IAS第19号（従業員給付）の改訂案（年金会計部分の改訂）に反対しようとしています。世界中から怒られそうな理由ですが、私は信じています。詳しくは申し上げませんが、この改訂内容は、基準の質の向上にならないだろうと思っており、その信念を持って反対意見を述べています。IASBの場合、個人の資格でフレームワークと照らして自分の意見を形成するので、結構、大変ですが、慣れるとそういう思考を常にしています。

関根 棄権も勇気が要りました。また、IESBAの場合、パブリック・インタレストということをよくいいます。自らの出身母体にとらわれず、世界のために、パブリック・インタレストのために作成するという方針だからです。IESBAのメンバーは18人ですが、基準を使う国はもっとたくさんあるので、メンバーとして会議に参加していない国も含めて、世界にとってどうかという観点が求められます。

7 英語でのコミュニケーションの秘訣

吉田 IASB、IFRS解釈指針委員会、IESBA、これらの会議は、その数日前に膨大な英文の資料が送られてきます。資料は日本語でもなかなか読み切るのが難しい内容とボリュームだと思っています。そういう膨大な情

報を、皆さんはどのように整理、インプットして会議に臨まれているのでしょうか。また、英語力維持向上のために実践していることなどがありましたらご披露いただけますでしょうか。

山田 IASBで一番つらかったのは、資料の読み込みです。1回の会議で、資料が1,000頁以上だったこともあり、それが10日前に来ます。1,000頁を読むのは、単純に10日で割っても1日100頁なので、これは大変でした。

私の場合、英語が速く読めないの、ボード（理事会）へ出席するために、日本を出発する時点で2割読めていたらよく読めている方です。ボードの週には、大体睡眠時間が3時間か4時間になります。議論するその日の朝に読み終わるという状況で、ある意味では自転車操業で乗り切っています。議論するまでに読み終え、おかしいと思うところはおかしいと質問や意見を言える状態になっていることが必要とされますが、要は、その日に議論する中身をどこまで理解しているかが一番重要です。きちんと理解していると、やはりその積み重ねで信頼関係ができ、あの人の言うことは聞かなければいけない、となります。

また、話を聞いてもらうための話術や手段が、ある意味で必要です。あるテーマで議論を起しますよね。私の場合、「その議論の最後に意見を言う人」という印象があるようで、議論の最後に、“tiny question”（ちょっとした質問）を持ち出すことがあります。正しい英語では“short question”ですが、そう言うと、「この人は何か言うな」と大体みんな身構え、聞いてくれます。変なことを

言ったら聞いてくれませんが、積み重ねの中で、自分の限られた英語力をベースにして、どのようにして自分の意見を聞いてもらえるようにするかという工夫は、常にしなければいけないと思います。

長く言いつぎてもいけないし、言うタイミングを失すると聞いてもらえなかったりするの、そのような工夫はとても大事です。

また、場数を踏むしかないかもしれませんが、英語特有の表現を覚える必要があります。ある局面で必ず皆が使う表現を適切に使えば、自分が何を言おうとしているのかが効果的に伝わると思います。

よく“the tail wagging the dog”といいますが、本末転倒な議論をしたいときに、あらかじめこれを言うと、みんな心構えを持ってくれます。これらをうまく使いながら、自分の言いたいことをあらかじめ準備しておくことが必要だと思います。

吉田 鷺地さん、お願いします。

鷺地 IFRS解釈指針委員会の場合も、相当な頁数があります。正直、私の場合、ASBJの若い方々に相当助けていただいたので、非常に感謝しております。

そうはいっても、当然、自分できちんと読まなければいけないので、準備としては、読んで、パラグラフごとに「ここは何が書いてある」というサマリーを小さなメモにまとめていました。日本語であれば、一見してこの頁にはこれが書いてあったと分かるのですが、悲しいかな、日本人なので、英語の文章のパラグラフの固まりから、すぐに何が書いてあったかというのが分かりません。ですので、きちんとペーパーに残しておく工夫をしました。

会議の流れの中でタイミングよく発言することが大事ですが、流れがどうなるかは予想が付きません。こうなるはずだろうと想定していても、全く違った流れで会議が始まると、言いたかったことが言えないという可能性もあります。ですから、ある程度自分で幾つかのパターンを想定して、こういう流れになったらこのタイミングでこれを言おう、あるいは、この流れになったら、こっちの言い方を先にしようと事前に議題ごとにシミュレーションしておかないと、タイミングよく発言することは難しいと思います。

ワンテンポ遅れて話をしても、一瞬白けたムードが広がり、何事もなかったかのように次のテーマが始まります。日本人である以上、ネイティブと同じようなスピードではレスポンスできませんが、それに対応できるようにするために、シミュレーションする必要があります。

吉田 関根さん、お願いします。

関根 IESBAの場合、IASBとは異なり、メンバーも非常勤で、開催日数も限られているので、一般に資料はそれほど膨大ではありません。

ただ、メンバーになって最初の頃は、大きな議論の最後の詰めだったということと、規程全体を直していたということから、資料は非常にボリュームがあり、また、メンバーになったばかりの自分には新しい内容が多かったことから、かなり大変でした。飛行機の中でずっと読んでいても読み終わらず、山田さんと同じく会議の直前までずっと読んでいました。

しかしながら、だんだん慣れてくると、これまでの経験が活かされますし、倫理の場合は会計とは少し違う

面もあるのかもしれませんが、大体パターンが分かってきます。

また、話すタイミングですが、意見を効果的に述べるにはどうすればよいかを私もよく考えていました。自分が言いたいことをお互いに勝手に言っているだけだと議論になりませんので、できるだけほかの方の発言や立場を考慮して、それを受けた形で自分の意見を言うように心掛けました。

8 世界で活躍できる会計人とは

吉田 それでは、今までのお話を踏まえて、本日のテーマの1つでもある「世界を舞台に活躍できる会計人育成」についてお伺いします。

国際的な組織、会議体で活躍・貢献できるような人材に求められる知識やスキル、心構えについて、お考えをお聞かせください。

山田 いろいろな会議で発言し、理解してもらうためには、そのメンバーとの関係をきちんと作っておかなければいけません。私が決めていることは、スタッフとの関係です。例えば、パブや食事へ行こうなどと誘われたら断らない。そして、行ったら最後まで帰らないと基本的に決めています。その間、必ず誰かと話をしているわけです。どういう場合でも誘われれば行くので、必ず誘われるようになります。

会議以外できちんとした会話をするのは、結構、難しいことです。そのためには、世界のどの国で何が起きているか常にアンテナを張ってなければいけません。

さらに、自分が議論する物事について、深く自分の頭で考えることも重要だと思っています。そして、それは

論理的に理解してもらえる考えである必要があります。単に好き嫌いや、これは日本では受け入れられないというロジックで止まっているは十分ではありません。「あなたは反対なだけだな」と、それ以上関係が深まらないのですが、きちんと考えてさえいけば、意見の違いを確認することもでき、通じ合える素地はあると思います。

英語については、国際的に活動しようとするれば最低限の英語力は必要で、これは学んでもらうしかありません。自分が専門的に知っているテーマ、例えば、会計なら会計の議論というのは、むしろやさしいですね。会計の専門用語を知っていれば、それを言うともみんな分かってくれます。それ以外のところで会話を成立させるのは、なかなか難しいと思います。政治や選挙の話など、各国の事情を知っていなければならないので大変です。

吉田 鶯地さん、お願いします。

鶯地 大切なのは、国際会議とは、何かを作り出すための会議であるということです。単なる放談会ではなくて、基準や解釈指針を作るなど、何らかの結論を導いて、それを世界に発信することを目的にしています。

しかも、それを限られた時間の中で行わなければなりません。なおかつ、その会議を受けて、スタッフがペーパーを作り直して作業しなければなりません。そういうことを念頭に置いて発言できるかどうかが、非常に大事だと思っています。

要は、スタッフの立場や議長の立場になって発言することです。自分の言うことが果たしてこのスタッフや議長がまとめるときに、ヘルプフ

ルかどうかを常に意識しなければならぬと思います。

そのためには、スタッフや議長が、どうしているかをきちんと理解しておかないと、ヘルプフルな発言はできませんし、ポイントがつかめぬと思います。例えば、私は会議の前日、前々日に行って、担当のスタッフと必ずミーティングを行い、それぞれのアジェンダの項目で、「あなたはどうしてこういう提案にしたのか」という話を聞きます。すると、その人はこう考えて、こういうペーパーにして、このようなコメントレーターが来たという背景が分かります。過去にこういう経緯があって、こういう結論を出したという話をきちんと聞いておくことは、非常に大事だと思いました。

そして、山田さんがおっしゃったように、広く情報を取りにいった方がよいと思います。日本での出版物では限りがあるので、インターネットを利用して自分で情報を取りに行く方がいいですね。また、国際会議等で知り合いができる機会も多いので、そういった人とのコネクションを通じて情報収集に努めるという姿勢も大事だと思います。

吉田 関根さん、お願いします。

関根 国際会議ではよく、コントリビューション（貢献）が必要だといわれるのですが、これは、発言により貢献していくことを意味しているようです。

先ほど山田さんがおっしゃったように、ロジックがしっかりしていて、きちんとした考え方に基づいている意見は、多少英語力がなかったとしても聞いてもらえます。また、これには信頼関係が必要です。信頼関係は、会議内と会議外と両方で作られ



日本公認会計士協会副会長

関根愛子氏

るように思います。

私も山田さんと全く同じで、会議外においては誘われたら断らない。行ったら最後までいることを基本としております（笑）。それでも言葉のハンデがありますし、文化的な違いや、ニュースソースの違いなど、なかなか理解できないことも多かったので、外に取りに行くのと合わせて、彼らの話している中に入って行ってそれを聞きながら、だんだんと自分でも意見を言うようにしています。

世界で活躍するためには、一定の英語力は必要ですが、英語があまり得意でないからといって物おしせず、身近にいる外国人とコミュニケーションを図っていくことも必要だと思います。

山田 今、IASBでは、寿司ナイトというものを開催しており、毎月1回、ロンドンでスタッフを日本食に連れていっています。結構、人気があり、毎回8人、多いときは20人近くが参加します。鶯地さんには、是非、続けてもらいたいです。コミュニケーションに役立つと思います。

鶯地 山田さんの寿司ナイトですが、私がIASBに挨拶に行った際、今度、山田さんの後任になりますと

言ったら、皆さんに「あなたは山田さんの寿司ナイトを引き継ぐのか」と、必ずそれを聞かれました（笑）。

関根 IESBAは1度、日本で会議を開催したことがありました。会議の際は、通常1回は公式のディナーがあり、日本で開催した際もJICPAの主催で行われましたが、そのほかに、有志を募り会費制のディナーを行うこともあります。日本ではしゃぶしゃぶを食べに行くことにしたところ、ほとんどのメンバーが参加してくださり、好評を博しました。

日本での開催については、メンバーのほとんどが日本は初めてということでしたので、東京は飛行場から遠いことと英語は通じないことに気を付けるようにとあらかじめ少しオーバーに注意喚起しておいたところ、国際会議に出ている方たちでするので上手に対処されており、特に問題もなく、とてもよい街だったと好評でした。

こうしたホスト役を行い、会議外での交流を深めるのも関係構築に役立つと思います。

9 今後、日本の会計人がIFRS開発に貢献するには

吉田 それでは、少し話題を変えさせていただきます。

先日、IFRS財団のアジア・オセアニア地区のサテライトオフィスが東京に設置されることが決まりました。

山田さんには以前、日本人がIASBの議長になってもよいというお話を伺ったことがあるのですが、今後、サテライトオフィスやアジア・オセアニアの会計基準設定主体会議（AOSSG）を使ってということも含めて、我が国の会計人や公認会計士はIFRSの開発に当たって、どのよ

うな役割を担い、どういう貢献をしていくべきでしょうか。

山田 サテライトオフィスについては、トラスティーズ（IFRS財団評議員）の島崎さん、藤沼さん、それから、財務会計基準機構（FASF）の萩原理事長をはじめ、誘致のために皆さんが非常に積極的に尽力されて、やっと日本に決まりました。主体はIASBなので、鶯地さんをお願いしなければいけないのは、IASBとして、このオフィスをどのように活用するかに関する戦略を立てていただきたいという点です。

このサテライトオフィスの設置場所については、10年後にロケーションを見直すことになっています。見直すというのは、どこかへ移すという意味ではなく、東京に置いておくことも含めてということです。したがって、日本としては、10年間、日本にサテライトオフィスがあってもよかったという評価が必要になると思いますので、日本の会計の関係者には、是非、IASBの活動を盛り立てていただきたいと思います。

極東といわれるように、日本の位置はアジアの中では偏った位置にあります。その偏った位置からどのようなサービスが提供でき、日本にオフィスがあることにどのようなメリットがあるのか、そして、そこからどういう関係を作れるかということが、戦略的には非常に重要であると思います。

吉田 これからの公認会計士に対するメッセージをお願いします。

山田 会計を目指す方にいえることは、IFRSを作る現場は非常に面白いということです。私は、10年務めました、1度もフラストレーションを感じたことはありませんで

した。鶯地さんの次を目指して努力する方が、是非、たくさん出てきてほしいと思います。

それから、公認会計士として活躍する若い人をお願いしたいのは、クライアントが英文でIFRSを読み、それを理解しているという状況になりますから、その監査に携わる公認会計士が英文でIFRSを読めないということは、許されないことだと感じてもらいたいということです。IFRSを原文で読んで、原文で意味を理解できる英語力を身に付けることは、最低限必要だろうと思います。

ますます世界は小さくなっていくと思いますので、英語でコミュニケーションが図れるようにすることを、ちょっとした日常の努力でいいですから積み重ねていただきたいと思います。長く積み重ねれば、かなり大きな違いになってくると思うので、是非、お願いしたいと思います。

最後に、私の夢は、15年後ぐらいに、IASBの議長を日本人から出したいということです。ですから、鶯地さんの次の次ぐらいの人がそのような立場になれるように、人材育成が必要だと思っています。

私はこれで退任しますが、そういう面で私がこれまで経験してきたことをお役に立てられれば、是非、何かしたいと思っています。

吉田 ありがとうございます。それでは、鶯地さん、お願いいたします。

鶯地 「アジアでのリーダーシップ」という言葉がありますが、日本が必ずしもリーダーシップを取らなければいけないと気負う必要はないと個人的には思っています。

学び合って、情報交換をするという姿勢が非常に大事で、例えば、先

行してIFRSを適用する韓国において、日本と同じような状況で強制適用を行った結果、どのような問題が起きたかということは、日本にとって非常に参考になる話だと思います。

一方で、日本は経済大国としての責任もありますし、違う仕組みもあるので、彼らに教えてあげられることもあります。そういったことを綿密に積み重ねていった結果として、日本のこれまでの経済の実績、会計に関する歴史の深さ、人材の豊富さなどからリーダーシップが生まれてくるのではないかと思います。最初から日本がリーダーシップを取るという気負いがありすぎると、逆にマイナスになるリスクがあるのではないかと個人的には思っています。

サテライトオフィスがどのような機能を探っていけるのかは、私自身もまだ考えが整理できていません。アジアだからということではなく、IFRSが世界できちんと受け入れられるために、どのようにアジアのこのサテライトオフィスを活用できるかを考えていきたいと思っています。

これからの公認会計士の皆さんに申し上げたいこととしては、勉強することの源泉は好奇心と申しますか、興味を持てるかどうかだと思います。アメリカには比較的興味を持ちやすいのですが、すぐ近くのアジアや、あるいは、ヨーロッパに関して、興味を持てるかどうか非常に大事だと思います。何にでも興味を持って、自分の仕事とその周り、例えば、韓国の会計士がどのようにしているかに興味を持って、情報交換をしていくという気持ちが大変だと思います。

吉田 関根さん、お願いします。

関根 今後、IFRSに限らず、会計や監査の世界は、国際的な動きと

無関係でいることはできなくなると
思います。しかしながら、現在、日
本では、英語やコミュニケーション
の違いがあるため、国際会議等に慣
れている方は限られているかと思
います。

日本には、優秀な方が非常に多く
いると思いますので、国際舞台で活
躍できる方が英語により限られてし
まうとしたら、それはとてももった
いないことだと思っています。先ほ
ど、英語の上手い下手ではなく中身
だと申し上げましたが、それでも国
際会議等では英語を読まなければな
りませんし、議論は英語で行われる
ため、一定の英語力は必要となりま
す。優秀な方、意欲のある方から、
この人だったらと、英語力をあまり
気にせずに入材を選べるようになる
のが理想と考えており、なんとかそ
うのようにできないかと思っています。

日本人の場合、通常環境では、
英語をそれほど流暢に話せないのが
普通ではないかと思いますが、ある
程度のレベルであれば、特に、若い
うちに努力をすれば達することはで
きると思います。私自身も実は、学
生時代に「英語の科目」としては得
意だったものの、外国人に話し掛け
られて何を言われているか全く分
らなかったのにショックを受けたよ
うな状況であり(笑)、それで英会話
学校に通った経験があります。

今の時代は、英語ができないこと
によって、自分の活躍できる場を狭
めるのはもったいないと思います。
特に、若い時は何でも吸収しやすい
と思いますし、英語はあくまでも道
具なので、できるだけ英語に触れて、
自分の能力を活かすために、そうし
た制限を少なくしていってもらえ
ばと思います。

10 IFRSの学び方

吉田 ありがとうございます。
IFRSの学び方について、皆様から
一言ずつお願いいたします。

山田 公認会計士の方は、現場
でIFRSの監査に携わるようになる
と思いますが、そのときに必ず原典
を参照する。その原典の近辺を必ず
読んで、自分のものにすることが一
番だと思います。

IFRSの基準は、相互に似たよう
な考え方をするものが幾つかありま
す。1つの問題に当たったときには、
いろいろ関連する事柄を思い浮かべ
なければならぬのですが、思い浮
かぶように自分の知識を体系化する
ことが大切だと思います。そうなる
とだんだん血となり肉となってくる
と思いますが、近道はありません。
必ず原典に戻り、原典を自分で読ん
で理解することだと思います。

それから、いろいろな基準の中
に違う考え方が幾つかあるものの、
そのうちの1つが採用されたという
ことがあります。このような場合、例
えば、クライアントが、採用されな
かった考え方をされるときには、IFRS
ではそういうことも踏まえてこうい
う選択がされているということを説
明することが重要になります。この
ためには、結論の根拠を読むことが
大切になります。なかなか難しいで
すが、原文に当たり、結論の根拠ま
で読まれることを繰り返していると、
知識が膨らんでくると思います。

鶯地 正に今、山田さんがおっ
しゃったとおりで、結論の根拠が重
要だと思います。ただ、もう少し初
歩的などころからいうと、最近かも
しれません、IFRSのパウンドボリュー

ムという全体をまとめたものの最後
に、グロッサリー(用語集)が付い
ています。グロッサリーはよくでき
ていて、どこの基準に関係するとい
うことも書いてあるし、その定義に
ついてはよく書いてあります。その
定義だけを読んでもピンとこないの
ですが、その定義と基準本体とを見
比べて読むと、なぜそういう定義に
なっているかが分かります。学ばれ
る入口として、グロッサリーは、使
える道具だと思います。

もう1つは、私はIFRS解釈指針
委員会にいたので、解釈をしていた
のですが、解釈には新しいプリンシ
パルはないのですが、あそこここ
の結び付きというのはあります。
例えば、IAS第11号(工事契約)と
IAS第18号(収益)との見比べのよう
なことがあって、IFRIC第15号(不
動産の建設に関する契約)ができて
いるというようなことがあります。

その流れというのは案外大事で、
基準の方からみれば、IAS第11号と
IAS第18号とIFRIC第15号というの
はバラバラですが、財務諸表の作成
者からすれば、自分の取引があるわ
けで、別に、これはIAS第11号でし
ているか、IAS第18号でしているか
は関係ないわけです。ただ自分の取
引があるだけです。

では、そのときにどう基準に当て
はめるかというときに役に立つのが、
「A Guide through IFRS」^(注)という本
で、装丁が緑色なので、グリーンブ
ックと呼んでいます。そのグリーンブ
ックには、この基準についてはこの基
準と関係しているということが、注
で書かれています。IFRICでプリン
シパルは変えませんが、割と重要な
変更、解釈があったらそれも書いて
あるというケースもあるので、これ

をツールにして読み進んでいくと、相互の関係が分かることがあります。

IFRS財団から出ている出版物は、よく考えられていますし、相当時間をかけて、プロフェッショナルが練って作っているのです。是非、IFRS財団から出されている出版物をよく読んでいただきたいと思います。

吉田 最後に、関根さん、お願いします。

関根 最近、よく若い方に、「これからはIFRSの時代といわれるものの、今すぐ監査で関わるかといえば、必ずしもそうではない。では、どのように勉強したらよいか」と聞かれることがあります。

IFRSそのものの勉強は、お2人がおっしゃったことを実践されればよいと思いますが、監査実務においてIFRSはまだ使われていないという場合にも、監査で担当されている企業が使用している日本の会計基準が、どういった考え方で作られているのかをきちんと理解することは、IFRSを学ぶ上でも非常に役に立つと思っています。

今の日本の会計基準は、かなりIFRSに近付いていますので、日本の会計基準書、結論の背景等を読んでいくと、その辺りがよく分かり、会計の考え方をしっかり身に付けることができます。

私自身も、公認会計士になって最初の5～6年は、日本基準以外の監査はほとんど携わっていませんでした。しかし、その後、米国基準の監査に携わったときに、日本基準での実務で原本に当たったり、考え方を学んだ経験は、現在よりかなり大きな差があった当時の会計基準であっても、非常に役立ちました。日本語で書かれた日本の基準から入ると、

かえって理解がしやすいこともあるかもしれませんので、そういった勉強方法もあると思います。

山田 最後に一言だけお礼を申し上げたいと思います。

これまで10年、大過なく過ごしてこられました。これは、この間、金融庁や日本経団連をはじめとする産業界、それから、日本公認会計士協会、ASBJやFASFなど、いろいろな関係者からご支援、ご協力をいただいた結果だと思っています。この場を借りて、皆さんにお礼を申し上げたいと思います。

それと、この『会計・監査ジャーナル』もそうですが、この10年間ずっと、IASBの会議報告を掲載していただいて本当に感謝しています。IASBの議論に興味がある方が日本語でフォローできるようにというつもりで書いてきました。

1973年に、IASBの初代日本代表として参加された方からずっと続いているレポートです。鶯地さんも、これから7月以降、是非、その伝統を引き継いで、日本の方に鶯地さんの経験をフィードバックしていただければと思います。本当にありがとうございました。

関根 お忙しいお仕事をしながら、いつも丁寧に記事を書いていただき、ありがとうございました。読者として非常に参考になりました。この10年間、IASBとIFRSが変化していく中で、それに対応してついていったのは、山田さんのおかげだと思っています。こちらこそ、ありがとうございました。

吉田 7月以降も、鶯地さんには、寿司ナイトとともに、IASB会議報告も、是非、引き継いでいただいて、『会計・監査ジャーナル』の

読者の方々に情報をいただければと思っています。

本日は、実際に参加してみないとなかなか分からない国際的な組織や国際会議の模様など、いろいろなお話をお聞きすることができました。

世界的な組織の最前線で活躍なさってきた皆さんのお話は、将来、国際的な業務や会計基準作りに携わることを目指す方々にとっては、大変興味深く、元気が出るものではなかったかと思っています。

本日は皆さん、お忙しい中、本当にありがとうございました。



司会：自主規制・業務本部

吉田健太郎氏

(注) <http://shop.ifrs.org/ProductCatalog/Default.aspx>